

日本計量生物学会

ニュース・レター No.42

1993年1月

目次

第4回日米バイオ統計学会議

日本計量生物学会1993, 94年度役員選挙について

日本計量生物学会1993年度年会のお知らせ

BIOMETRICS の要約

大学の改組における統計学の教育・研究体制について

1992年度第6回理事会議事録

Japanese Journal of Biometrics へようこそ!!

会計理事からのお知らせ

事務局からのお知らせ

その他

佐藤俊哉 (統計数理研究所)

The Fourth Japan-US Biostatistics Conference in the Study of Human Cancer が「Measurement Error モデル」をメイントピック、「がん研究に有用な統計的方法の最近の発展」をサブトピックとして、11月9日から11日まで2日半にわたり都ホテル東京で開催された。アメリカ側6, 日本側8の招待講演に100以上の参加者を集めて活発な討論が行われた。この会議の歴史的な経緯はニュースレターNo.36に統計数理研究所の柳本武美氏による「IBCST 91」という小文に述べられているのでそちらを参照していただきたい。

会議の内容は、日本側, アメリカ側ともに高いレベルの内容にもかかわらず、数式に偏らないで現実の問題に即した説明がなされていた。ただし、日本側の講演者の内5名は前回の広島での講演者でもあり、アメリカ側は1名以外は前回と顔ぶれが異なることから、日本のこの分野における層の薄さは否定できない。このような会議が刺激となってBiostatisticsに興味を持つ若い研究者が育つことを心から期待するし、またそれがこの会議の目的の一つであるとも聞いている。

第4回日米バイオ統計学会議

アメリカ側講演者と話していて叱られた話の一つ。お前は我々のディスカッションが理解できたかと聞くので、正直よく分からなかったと答えると、なぜ「もっとゆっくりしゃべってほしい」とか「理解できなかったので、もう一度説明してほしい」と言わないのか、もっともなことをいう。しかし「私は何度も『くれぐれもゆっくりしゃべってほしい』とお願いしたではないか」というと、そうではなくディスカッションをしている今そのときに「分からないのでもう一度ゆっくりお願いします」といわなければならない、黙っているのが日本では普通なのかも知れないが、異なった意見を聞けることがこのような会議のいちばんのメリットなのだからそんなことではいけない、とたいへん叱られてしまった。まったくおっしゃる通りであり今後は気をつけたいと考えている。

最後に、このような国際研究集会の運営はどうたいへんな仕事はないが、オーガナイザーの九州大学柳川堯氏とNIEHSのDavid G. Hoel氏のご苦勞にお礼を述べて終わりたい。

日本計量生物学会1993, 94年度役員選挙について

下記の要領で実施されますのでお知らせします。

日本計量生物学会1993, 94年度役員選挙要領

1. 本ニュースレターのp. 4～8の被選挙人名簿から、理事を3名、監事を1名選出し同封の投票用紙に記入してください。なお、会費を2年以上滞納している人には、選挙権・被選挙権ともにありません。
2. 締切日は1993年1月31日です（消印有効）。
3. 次の投票は無効となります。
 - 1) 所定以外の用紙による投票
 - 2) 理事3名、監事1名を越えて記入した投票
 - 3) 投票者の氏名など余分な記入のある投票
4. 詳しくは、本ニュースレターp. 3～4の選挙細則を御覧ください。

日本計量生物学会 選挙管理委員会

委員長 折笠 秀樹

委員 橋本 哲男

日本計量生物学会会則

[総則]

1. 本会は日本計量生物学会 (The Biometrics Society of Japan) と称する。
2. 本会の事務局は、原則として庶務理事の所属する機関におく。

[目的及び事業]

3. 本会は生物学・医学・農学その他の関連分野における科学的研究を計量的・数学的・統計的方法を用いて推進するとともに、その研究の普及、研究者相互の交流を促進し、かつ、外国の研究団体との連絡を図ることを目的とする。
4. 本会は前条の目的を達成するために、次の事業をおこなう。
 - (1) 研究発表会・講演会・シンポジウムの開催
 - (2) 会誌・図書および資料の刊行
 - (3) 外国の関連学会との連絡および協力
 - (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業

[会員]

5. 本会の会員は次のとおりとする。
 - (1) 正会員・・・第3条にあげた研究に従事する者またはそれに関心を有する者

- (2) 学生会員・・・大学の学生（大学院をふくむ）あるいはこれに準ずる者
- (3) 賛助会員・・・本会の目的に賛同し、その事業に財政的援助をする者または団体
6. 本会に正会員または学生会員として入会しようとする者は、正会員1名の紹介により、理事会の承認を受けなければならない。
7. 会費として正会員は年額8,000円、学生会員は4,500円、賛助会員は一口10,000円以上を毎年1月末日までに納入しなければならない。ただし、国際計量生物学会からの機関誌 Biometrics の送付を希望しない者の会費は、正会員・学生会員とも年額3,500円とする。
8. 会費を2年以上滞納した者は、理事会において退会した者とみなすことができる。
9. 会員はつぎの特典を受ける。
 - (1) 本会が刊行する会誌および資料の配布を受けること
 - (2) 本会の行う事業の通知を受けこれらに参加すること
 - (3) 会則及び別に定める規則により、本会役員の選挙権および被選挙権を有すること
 - (4) 国際計量生物学会の機関誌 Biometrics を年4回受領する（ただし前記7のただし書きに該当する者は除く）

[役員]

10. 本会に次の役員を置く。
 - (1) 理事若干名、うち1名を会長とする
 - (2) 監事2名
11. 理事および監事は正会員のなかから選任する。役員の選任方法については総会で定める。会長は理事会において互選する。
12. 会長は本会の業務を総理し、理事会の議長となり、また本会を代表する。理事は理事会を組織し、総会の権限に属する事項以外の事項を議決し、執行する。理事のなかから庶務担当・会計担当および編集担当をそれぞれ1名選任する。
13. 本会の役員の任期は2年とし再選を妨げない。
14. 役員に欠員を生じたときは、理事会の議決により後任を補充することができる。後任者の任期は前任者の残りの期間とする。

[会議]

15. 本会の会議は総会と理事会とする。総会は通常総会と臨時総会とする。総会は正会員・学生会員および賛助会員のなかの個人会員をもって組織する。理事会は理事をもって組織する。
16. (1) 通常総会は毎年1回4月に会長が招集する。
 - (2) 臨時総会は理事会または監事が必要と認めたとき、会長が招集する。また、会長は正会員の10分の1以上から会議の目的を記載した書面による請求があったときは、これを招集しなければならない。
 - (3) 通常総会を招集するには少なくとも6週間以前に、会議の目的である事項、日時および場所を記載した書面をもって会員に通知しなければならない。
17. 通常総会の議長は会長とし、臨時総会の議長は出席正会員の互選によって定める。
18. 総会はこの会則で定めるもののほか、次の事項について議決する。
 - (1) 事業計画および収支予算についての事項
 - (2) 事業報告および収支決算についての事項
 - (3) その他本会の運営に関する重要な事項
19. (1) 総会は正会員現在数の5分の1以上の者が出席しなければ、その議事を開き、議決することができない。ただし、当該議事につき、あらかじめ書面をもって意思を表示した者または表決の委任者は出席者とみなす。

(2) 総会の議事は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

20. 理事会はこの会則に定めるもののほか、次の事項について議決する。

- (1) 総会に提案すべき事項
- (2) 会務の執行に関する事項
- (3) その他会長が必要と認めた事項

[会則の変更および解散]

21. 本会則の改正には総会において出席者の3分の2以上の議決を経なければならない。

[補則]

1. 本学会は国際計量生物学会 I B S の日本支部を兼ねる。会長、庶務理事、会計理事はそれぞれ同支部の President, Secretary, Treasurer を兼務する。
2. I B S の Council member は本学会の理事に就任する。
3. 1991年度の会費は現行のままとし、上記7.の会費は1991年度より施行する。
(正会員8,000円、学生会員4,500円)

日本計量生物学会役員選出に関する細則

(総則)

1. 本会の役員の選出、および委嘱等は会則のほか、この細則の決めるところによる。
2. 理事の定数は、当分の間20名以内とする。ただし、そのうちの15名の選出は正会員の選挙による。ほかは選挙後の当選人による連絡会議に於て必要に応じて推薦により追加するものとする。
3. 監事は2名とし、選出は正会員の選挙による。ただし、理事は監事を兼ねることができない。
4. 会長、庶務理事、会計理事は理事会が理事の中から互選し、総会の承認を経て選出する。
5. 各種委員会の委員は、理事会において委員長を理事の中から委嘱し、他は正会員の中から選考し、委嘱する。
6. 役員の任期は、理事および監事の選挙後の総会から2年後の総会までとする。ただし、中途就任の役員の任期は、就任の日から前記の期間とする。
(理事および監事の選挙)

7. 理事および監事は、郵送による無記名投票によるものとする。
8. 選挙を公正、かつ円滑に進めるために、選挙管理委員会を設置し、その管理下で実施する。
9. 理事および監事の選挙人と被選挙人は、選挙年の1月1日現在、正会員であるものに限る。
10. 選挙方法等は、選挙管理委員会内規として別に定める。
(当選者の就任)
11. 理事および監事に当選したものは、原則として就任を辞退できない。
(追加理事の推薦)
12. 理事の当選人は選挙直後に連絡会議を開催し、必要に応じて推薦理事5名以内を選出することができる。
13. 推薦理事の選出は、会則の補則2条によるものの他は、当選理事の専攻分野と地域性等を配慮して行う。
(三役の選出)
14. 会長、庶務理事、会計理事の選出は、選挙後の第1回理事会で行い、総会において承認を得る。ただし、理事会における選出方法は出席理事(委任状提出者も含む)の互選による。

日本計量生物学会選挙管理委員会内規

1. 選挙管理委員会(以下、委員会)は、理事会が正会員の中から委嘱する委員長1名、委員1名により構成される。
2. 委員会は、選挙日程(投票締切日、開票日など)、選挙人および被選挙人の資格条件等を決定し、有資格の正会員に告示し、選挙を実行する。
3. 投票は、郵送による無記名投票とし、委員会が定めた投票用紙により、理事3名、および監事1名を投票する。
4. 所定の用紙以外による投票や、差出人(投票者)の氏名を記した投票は無効とする。
5. 投票用紙の送付に際しては、以下の事項を含む文書を選挙人の便に供するため添付する。
 - (1) 選挙人および被選挙人の資格、投票の郵送先、投票締切日、投票の有効性などの概要
 - (2) 被選挙人名簿
 - (3) その他、委員会が必要と認める事項

6. 開票作業は、選挙管理委員会が行う。
7. 当選人の決定は、以下の規則に従うものとする。
 - (1) 理事は、有効投票の最多数の得票者から順に上位15名を当選人とする。
 - (2) 監事は、有効投票の最多数の得票者から順に、理事の当選人以外の上位2名を当選人とする。
 - (3) 理事、監事の当落の境界に同数の得票者があり、定数を越える時は、委員会が抽選で選ぶ。
 - (4) 当選人の決定に関して疑義が生じた場合は、そのつど委員会に於いて決定する。
8. 開票後、委員会は当選人に当選の旨をすみやかに通知する。また、委員長は、理事会に対して以下の報告書を提出する。
 - (1) 投票締切日、開票日時および場所
 - (2) 有権者総数、有効投票人数、無効投票人数、有効記名数
 - (3) 理事、監事の当選人の氏名、得票数の一覧表
9. 委員会の任務は、当選人への通知と理事会への報告書提出をもって終わりとする。

日本計量生物学会被選挙人名簿

(1992-12-1 現在)

北海道・東北

石栗 秀	日本甜菜製糖(株) 総合研究所
今田 和史	北海道立水産孵化場
北村 昌美	山形大学 農学部
佐藤 義治	北海道大学 工学部
柴田 和博	北海道バイオテクノロジー専門学校
柴田 信明	岩手大学 農学部
須川 和明	北星学園大学 経済学部
関口 武司	いわき明星大学 理工学部
中村 典裕	秋田県立農業短期大学
鳴島 睦子	(株)アジャスト
早川 康博	北里大学 水産学部
宮井 俊一	東北農業試験場

関東

浅井 晃	東洋大学 経済学部
安達 直	慶応義塾大学 医学部

安達 健	森永乳業(株) 生物科学研究所	折笠 秀樹	自治医科大学
阿部 学	ファイザー製薬(株)	開原 成允	東京大学 医学部
安藤 正一	山之内製薬(株)	柏木 涉	大鵬薬品工業(株)
安藤 律子	エーザイ(株)	門山 允	東京国際大学 商学部
飯田 一郎	(株)小林コーセー研究所	金澤雄一郎	筑波大学
飯塚 悦功	東京大学 工学部	金森 雅夫	東邦大学 医学部
石井 丈夫	東京大学 海洋研究所	金藤 浩司	統計数理研究所
石垣 智子	東京大学 医学部	鎌倉 稔成	中央大学 理工学部
石川 亮介	海外新聞普及(株)	神尾 正己	東京慈恵会医科大学
石毛 光雄	農業生物資源研究所	管家 英治	宇都宮大学
石崎 恵美	萬有製薬(株)	菅野 隆三	東京歯科大学
石塚 直樹	クイントails・パシフィック社	菊池 圭一	ブリストル・マイヤーズスクイブ(株)
石野 得三	山之内製薬(株)	岸野 洋久	東京大学海洋研究所
石原 龍雄	神奈川県農業総合研究所	工藤 昭夫	東海大学 開発工学部
石間 紀男	食品総合研究所	熊谷 明夫	東京田辺製薬(株)
伊豆本 透	サンド薬品(株)	熊沢 蕃	日本原子力研究所
市川 雅教	東京外国語大学	栗木 哲	東京大学 工学部
伊津野 孝	慶応義塾大学 医学部	巖 浩	東京大学 医学部
稲岡 則子	日本アイ・ビー・エム(株)	小谷 孝一	東京理科大学 理工学部
井村 治	農業環境技術研究所	小西 貞則	統計数理研究所
岩崎 学	防衛大学校	小林 廉毅	帝京大学 医学部
上坂 浩之	ヘキストジャパン(株)	小林 龍一	立教大学
上原 秀昭	(株)ツムラ	駒澤 勉	統計数理研究所
上村 一夫	流通経済大学	小松 勇作	
上村 賢治	東京大学 農学部	斉尾乾二郎	東京農業大学 農学部
魚井 徹	山之内製薬(株)	佐伯圭一郎	文教大学 教育学部
鵜飼 保雄	東京大学 農学部	斉藤 弘	第一製薬(株)
大石 正平	科研製薬(株)	酒井 清六	大東文化大学
大石 雅彦	(株)資生堂	酒井 弘憲	三菱化成(株)
大内 幹夫	サントリー(株)	佐久間 昭	東京医科歯科大学 難治疾患研究所
大隅 昇	統計数理研究所	佐々木 貴	フェルミタリア カルロエルバ(株)
大塚 克己	群馬県蚕業試験場	佐々木秀雄	旭化成工業(株)
大塚 雅雄	農業研究センター	定村 薫	東京国際大学
大塚 芳正	日本ロシュ(株)	佐藤 邦弘	日本化学工業(株)
大槻 成章	呉羽化学工業(株)	佐藤 喬俊	日本シンテックス(株)
大友 栄松	東京国際大学	佐藤 俊哉	統計数理研究所
大野 長壽	大正製薬(株)総合研究所	佐藤 昇	ファイザー製薬(株)
大橋 靖雄	東京大学 医学部	塩谷 実	明星大学
岡 健司	(株)日本海洋生物研究所	塩見 正衛	草地試験場
尾形 良彦	統計数理研究所	篠崎 信雄	慶応義塾大学 総合政策学部
岡本 直幸	神奈川県立がんセンター	渋谷 政昭	慶応義塾大学 理工学部
奥 喜正	流通経済大学流通問題研究所	島崎 茂樹	三菱化成(株)
奥住 幸雄	日本アップジョン(株)	嶋津 靖彦	中央水産研究所
奥野 忠一	東京理科大学 工学部	清水 邦夫	東京理科大学 理工学部
斧田大公望		清水 秀史	三井製薬工業(株)

下郷 雅美	ノボノルディスクファーマ(株)	二宮 正士	農業環境技術研究所
白石 高章	横浜市立大学 文理学部	沼田 真	淑徳大学 社会福祉学部
新藤 純子	農業環境技術研究所	野口 岩男	昭和大学 教養部
杉浦 成昭	筑波大学	野沢 昌弘	東京理科大学 工学部
杉田 稔	東邦大学 医学部	芳賀 敏郎	東京理科大学 工学部
杉森 俊彰	日本アイ・ビー・エム	袴田 共之	農業環境技術研究所
杉山 高一	中央大学 理工学部	橋本 修二	国立公衆衛生院
鈴木 和幸	電気通信大学	橋本 哲男	統計数理研究所
鈴木義一郎	統計数理研究所	長谷川政美	統計数理研究所
鈴木 冬香	鈴木病院	秦 正弘	鳥居薬品(株)
関 利之	ワイズ・エーザイ(株)	畑村 又好	
高木 廣文	統計数理研究所	鳩山由紀夫	衆議院議員
高津 順吉	大洋漁業(株)	馬場 康維	統計数理研究所
高野 泰	東京大学 農学部	林 邦彦	山之内製薬(株)
高橋 行雄	日本ロシュ(株)	林 知己夫	放送大学
高宮 陽一	(株)日本技術資料センター	比江島欣慎	萬有製薬(株)
滝沢 隆安	動物繁殖研究所	樋口伊佐夫	帝京技術科学大学
田栗 正章	千葉大学 理学部	菱沼 従尹	(財)寿命学研究会
竹内 啓	東京大学 先端科学技術研究センター	平河 威	三井製薬工業(株)
		平川 正勝	協和図書(株)
竹澤 邦夫	農業環境技術研究所	広岡 秀樹	山之内製薬(株)
龍原 哲	東京大学 農学部	廣津 千尋	東京大学 工学部
田中 健	(株)日本科学技術研修所	富士 敏彦	日本スクイブ(株)
種村 正美	統計数理研究所	福富 和夫	国立公衆衛生院
玉井 康治	(株)CRC総合研究所	藤田 利治	国立公衆衛生院
田宮 高紀	東京理科大学 理工学部	伏見 正則	東京大学 工学部
田村 義保	統計数理研究所	舟喜 光一	持田製薬(株)
丹後 俊郎	国立公衆衛生院	古川 敏仁	(株)エスアールエル
津田 義和	立教大学 一般教育部	逸見 功	東京都神経科学総合研究所
椿 広計	慶応義塾大学 理工学部	細野 泰彦	武蔵工業大学
椿 美智子	電気通信大学	堀江 正樹	農林水産技術情報協会
津村 善郎	東京理科大学 理学部	本多 正幸	千葉大学 医学部
富沢 貞男	東京理科大学 理工学部	牧野 国義	都立衛生研究所
富田 栄一	中外製薬(株)	増山元三郎	東京理科大学 理学部
朝野 芳郎	エーザイ(株)	松井 研一	三共(株)
永井 正規	自治医科大学	松永 隆司	食品総合研究所
中谷 知弘	協和発酵工業(株)	松村 康弘	国立健康・栄養研究所
長谷 文雄	日本ルセル(株)	松本 幸雄	国立環境研究所
永見 俊之	日本農薬(株)	水野 隆一	ファイザー製薬(株)
中村 和雄	農業研究センター	三中 信宏	農業環境技術研究所
中村 靖彦	ソルベイ 明治薬品(株)	三原 光雄	エーザイ(株)
西尾 敦	明治学院大学 経済学部	宮入加寿也	サントリー(株)
西川 匡英	森林総合研究所	宮岡 悦良	東京理科大学 理学部II部
西川 浩昭	東邦大学 医学部	宮川 強	東京理科大学 理工学部
西脇 茂利	(財)日本鯨類研究所	宮川 三郎	栃木県農業試験場 栃木分場

宮北 誠 国立埼玉病院
 三輪 哲久 農業環境技術研究所
 村上 正康 敬愛大学
 盛 昭雄 東レ(株)
 矢島 敬二 東京理科大学 工学部
 柳井 晴夫 大学入試センター
 柳本 武美 統計数理研究所
 矢船 明史 北里研究所
 山岡 和枝 帝京大学 法学部
 山口 直人 国立がんセンター研究所
 山崎 秀夫 東京都立大学 理学部
 山村 光司 農業環境技術研究所
 山本康次郎 東京大学 医学部
 山本 幹夫 総合保健研究所
 横田 嘉彦 ファイザー製薬(株)
 横山 英明 自治医科大学
 吉川 敬 NTT
 吉澤 正 筑波大学大学院 経営システム科学
 吉田 彰夫 日本化薬(株)
 吉田 正昭 中央大学
 吉村 功 東京理科大学 工学部
 和田 康彦 畜産試験場
 渡辺 敏彦 科研製薬(株)
 渡辺 則生 中央大学 理工学部

中部・甲信越

浅井 清朗 名古屋経済大学
 飯嶋 弘 キッセイコムテック(株)
 伊藤 孝一 南山大学
 井本 精一 (株)イナリサーチ
 祝崎 博明 新潟大学 農学部
 内田 良男 愛知学院大学 教養部
 小澤 賢一 キッセイ薬品工業(株)
 木村 清郎 (株)生物化学技術研究所
 香田 繁 東京理科大学 諏訪短期大学
 河本 綏雄 野菜・茶葉試験場
 近藤 貞昭 信州大学 繊維学部
 嶋崎 昭典 信州大学 繊維学部
 新保 外志 富山県立技術短期大学
 竹内 公男 新潟大学 農学部
 西岡 孝彦 信州大学 繊維学部
 廣沢 毅一 松本歯科大学
 蓬原 雄三 名古屋大学 農学部
 細萱 茂実 山梨医科大学
 堀内 徳高 中央協同組合学園

増田 賢司 山梨学院大学 商学部
 松沢 照男 北陸先端科学技術大学院大学情報
 科学センター
 三浦 幹彦 信州大学 繊維学部
 山本 和子 福井医科大学

関西

浅野 弘明 京都府立医科大学
 安達 毅 日本臓器製薬(株)
 伊藤 博 田辺製薬(株)
 稲垣 宣生 大阪大学 基礎工学部
 稲田 紘 国立循環器病センター研究所
 岩崎 正和 バイエル薬品(株)
 浦狩 保則 塩野義解析センター
 大槻 徹 住友製薬(株)
 緒方 昭 鈴鹿医療科学技術大学
 丘本 正 追手門学院大学 経済学部
 小川 幸男 日本商事(株)
 片山 和夫 塩野義解析センター
 河村 徹郎 鈴鹿医療科学技術大学
 木船 義久 武田薬品工業(株)
 浄住 勤慈 大日本製薬(株)
 楠 正 大阪電気通信大学 工学部
 隈本 秀樹 塩野義解析センター
 栗林 和彦 塩野義解析センター
 後藤 昌司 近畿大学 農学部
 米虫 節夫 和歌山県衛生公害研究センター
 小山 武信 京都大学 農学部
 佐々木義之 日本シェーリング(株)
 澤 淳悟 アイ・シー・アイファーマ製薬(株)
 島田 公 京都大学 霊長類研究所
 庄武 孝義 バイエル薬品(株)
 白岩 直人 (財)日本中毒情報センター
 新谷 茂 塩野義解析センター
 惣田 隆生 大阪大学 医学部
 武田 裕 田辺製薬(株)
 竹綱 正典 塩野義研究所
 田崎 武信 (株)ミドリ十字
 田中 和哲 神戸女子大学 文学部
 辻谷 将明 大日本製薬(株)
 出村 政嗣 塩野義解析センター
 寺西 孝司 吉富製薬(株)
 徳永 修 大日本製薬(株)
 百々 秀夫 武庫川女子大学 家政学部
 永田 久紀

中田 雅臣	大塚製薬(株)	白木原国雄	長崎大学 水産学部
西 次男	日本チバガイギー(株)	新城 明久	琉球大学 農学部
橋本 敏夫	吉富製薬(株)	陶山 昭彦	鳥取大学 医学部
浜田知久馬	武田薬品工業(株)	田中 純子	広島大学 医学部
広岡 博之	龍谷大学 経済学部	田中 卓	広島大学原医研
古川 俊之	国立大阪病院	田中 豊	岡山大学 教養部
前田 博	藤沢薬品工業(株)	為近 美栄	川崎医科大学
前田 玲	京都薬品工業(株)	垂水 共之	岡山大学 教養部
松岡 浄	藤沢薬品工業(株)	辻岡 克彦	川崎医科大学
松原 義弘	塩野義解析センター	坪田 信孝	広島大学 医学部
松宮 義治	三重大学 生物資源学部	永井 武昭	大分大学 工学部
光森 達博	鐘紡(株)	中島 栄二	放射線影響研究所
森川 敏彦	武田薬品工業(株)	中条 邦昭	
守屋 和幸	京都大学 農学部	中西 晃	吉富製薬(株)
八坂 敏夫	P. L. メディカルセンター	中村 剛	長崎大学医療短期大学
山内 平介	大日本製薬(株)	早川 式彦	広島大学原医研
米澤 勝衛	京都産業大学 国土利用開発研究所	姫野 信吉	姫野政経外科病院
和田 武夫	武田薬品工業(株)	兵頭 義史	岡山理科大学 理学部
		平岡 政隆	広島大学原医研
		平川 顕名	島根医科大学
		藤井 良宜	宮崎大学 教育学部
		藤越 康祝	広島大学 理学部
		藤田正一郎	放射線影響研究所
		本田 純久	長崎大学 医学部
		松浦 正明	広島大学原医研
		松尾 良満	佐賀県農業試験場
		松本 源生	福岡県衛生公害センター
		宮井 正弥	姫路獨協大学 一般教育部
		務中 昌己	広島大学原医研
		森尾 真介	鳥取大学 医学部
		山根 康彦	川崎医科大学
		柳川 堯	九州大学 理学部
		山口 行治	ダイセル化学工業(株)
		山本 英二	岡山理科大学
		山本 純恭	国際自然科学研究所
			国外
		井山 審也	マレーシア農科大学
		神保 武夫	FAO (在 Italy)
		鈴木 茂	JICA (在 Chile)
		Hong-Pang Wu	Taiwan
		Tsan-Long Lin	Taiwan
赤澤 宏平	九州大学 医学部		
有田清三郎	川崎医科大学		
安楽 和夫	西南学院大学		
池田 正人	産業医科大学		
稲田 充男	島根大学 農学部		
江口 真透	島根大学 理学部		
大久保利晃	産業医科大学		
大瀧 慈	広島大学原医研		
大竹 正徳	放射線影響研究所		
織田健次郎	中国農業試験場		
越智 義道	大分大学 工学部		
景山 三平	広島大学 学校教育学部		
刈谷 丈治	山口大学 情報処理センター		
仮谷 太一	川崎医科大学		
甲田 茂樹	岡山大学 医学部		
河野 和正	九州大学 教養学部		
後藤みづみ	吉富製薬(株)		
近藤 久義	長崎大学 医学部		
阪口 紘治	九州大学 教養部		
佐藤 学	広島大学 工学部		
柴田 義貞	放射線影響研究所		
志村 健一	琉球大学 法文学部		
正法地孝雄	広島大学 総合科学部		

日本計量生物学会1993年度年会のお知らせ

標記の年会を下記の要領で開催することになりましたので、奮って御参加下さい。

1. 日 時 : 1993年4月23日(金)
 2. 場 所 : 丸の内センタービル20階大会議室
 3. 参加費 : 2000円(資料代含む)
 4. 特別セッション: 未定
 5. 一般講演
 - (a) 申込方法 : 官製葉書に氏名、連絡先(所属、住所、電話番号)、演題名(英文タイトル併記)を記入して下記送り先へお申し込み下さい。
 - (b) 申込締切 : 1993年2月27日(土)
 - (c) 原稿の提出について
講演申込者には後日、所定の複写用原稿用紙をお送りします。
 - (ア) 発表用原稿(2枚)
提出締切 : 1993年3月31日(水)
 - (イ) Bulletin 掲載用原稿(15枚以内)
提出締切 : 1993年6月15日(火)
- 年会にて発表された演題はすべて本学会誌「Japanese Journal of Biometrics」に掲載予定ですので、発表内容を論文形式にまとめて上記締切日までにお送り下さい。なお、英文・和文のどちらでも結構ですが、和文の場合は
- ① 英文の Summary, Keywords を必ず付ける。
 - ② ワープロまたはタイブ印刷をする。
- を励行して下さいようお願いします。
- Japanese Journal of Biometrics は International Biometric Society の日本支部の活動状況を本部に報告する重要な機関誌であり、その英文アブストラクトは英文ニュース Biometric Bulletin に掲載されますので、ご協力をお願い致します。
6. 送り先
- 、講演申込および原稿の提出はすべて日本計量生物学会事務局(住所は最後の頁に記載されています)にお送り下さい。

企画担当理事 後藤 昌司
佐藤 喬俊
高野 泰
福富 和夫

付記 : 1993年4月22日(木)には、同場所にて応用統計学会年会が開催される予定です。

BIOMETRICS の要約 (Vol.48, No.3)

“Testing Goodness of Fit of a Multinomial Model Against Overdispersed Alternatives (pp. 711-719)”

B. S. Kim and B. H. Margolin

「過剰分散対立仮説に対する多項モデル適合度検定」

多項モデルの適合度検定を過剰分散を取り込んだディリクレ多項モデル対立仮説に対して行なう問題を扱い、 $C(\alpha)$ 検定統計量に対して改善された近似標本分布を与える。この改善で検定の実質水準、検出力の精度が上がり精密な議論が出来る。ピアソンのカイ二乗検定に対する $C(\alpha)$ 検定の漸近効率 ≥ 1 であることが解析的に示される。モンテカルロ実験によるとこの漸近効率は、ディ

リクレ多項モデルの各標本数が異ならない限り1より大きく上がらない事が示唆される。

山本英二 (岡山理科大学)

“A Parametric Family of Correlation Structures for the Analysis of Longitudinal Data (pp.733–742)”

A. Munoz, v. Carey, J. P. Schouten, M. Segal, and B. Rosner

「経時データの解析のための相関構造に関するパラメトリック族」

疫学の場合は、しばしば数多くの短い時系列データに出くわす。推定効率を最適にするためには、相関構造を簡略化したパラメータ化が望まれる。私達は、多変量正規データをモデル化するために、指数的に減衰する相関構造を提案する。時間 s 単位で分離した2つの観察値の間の相関は、 (γ, s, θ) のべき関数としてモデル化される。ここで、 γ は s 単位離れた要素間の相関であり、 θ は減衰パラメータである。 $\theta = 0$, $\theta = 1$, $\theta \rightarrow \infty$ 時には、それぞれ相関構造が compound symmetry, 一次の自己相関, 一次の移動平均過程に対応する。AR(2)の従属構造や、変量効果とAR(1)誤差の混合モデルは、上の特別の場合ではないが、それでも短い時系列の族の中でよく近似できる。パラメータ推定のための最尤法と、中間的モデル($0 < \theta < 1$)の解釈については、オランダ成人における肺機能のモデリングと、HIVタイプIに感染した同性愛男性でのT細胞(CD4値)のモデリングを例に挙げて議論が為された。

折笠 秀樹 (自治医科大学)

“Sequential Monitoring for Comparison of Changes in a Response Variable in Clinical Studies (pp.765–779)”

M. C. Wu and K. K. G. Lan

「臨床研究でレスポンスの変化を比較するための逐次モニタリング」

Lan and DeMets (1983, Biometrika 70, 659–663) が提案した臨床試験の逐次モニタリングのための消費関数が、連続なレスポンス変数での変化の比較が主目的である状況に適用される。死亡、

脱落、訪問ミスは、追跡時の測定値が右打ち切りであるとか、ある患者で欠損となったために生じた可能性がある。さらに、打ち切りとなる確率は、レスポンス変数の値に依存していることもある(情報を伴う打ち切り)。私達は、治療効果をレスポンス変化の期待曲線下面積で二群比較することを提案する。レスポンス曲線が両群とも時間について一次関数である時には、この比較はレスポンス変数に関する変化率を比較すること同値である。逐次検定統計量の共分散が導出される。また、独立に増加するための条件が示される。長期の治療効果を評価しようとした研究に対して、通常の消費関数 (Kim and DeMets, 1987, Biometrika 74, 149–154) を右にシフトし、残りの区間でスケールし直して得られる消費関数も提案される。こうしたシフトを伴う消費関数は、Lung Health Study (Anthonisen, 1983, American Review of Respiratory Diseases 140, 871–872) のモニタリング計画に応用される。

折笠 秀樹 (自治医科大学)

“Use of External Rates in Nested Case-Control Studies with Application to the International Radiation Study of Cervical Cancer Patients (pp. 781–794)”

D. C. Thomas, M. Blettner, and N.E. Day

「Nested case-control 研究における基準死亡率の利用と子宮頸がん患者の国際放射線研究への応用」

コホート内ケース・コントロール研究の一つである nested case-control 研究において、ケースとコントロール間での共変量のマッチした比較、対象コホートの観察死亡数と基準死亡率とコントロールから推定された平均相対リスクにもとづいた期待死亡数の比較、の2つを総合する方法を提案する。ケースとコントロールの比較は条件付きロジスティックモデルにもとづいて、観察死亡数と期待死亡数の比較は(無条件の)ポアソン回帰にもとづいて行われる。この2つの尤度は直交することを示し、その結果2つの尤度の積は、全コホートのメンバーについて共変量を観察できた場合の全尤度の推定量となる。パラメータ推定と有意性検定は尤度の積を最大化することによって通

常通り実行できる。放射線照射を受けた子宮頸がん患者に発生する白血病データの解析に提案する方法を応用する。このデータは、最初に行われたコホート研究では照射後最初の15年間に明かな白血病の増加を示したが、コホートのメンバー全員に対して照射線量を得ることはできなかった。しかしながら、引き続き行われた nested case-control 研究では異なった量-反応関係と時間に依存した効果の修飾を仮定したモデルに有意な差を示せなかった。2つの尤度を総合した解析では様々な量-時間-反応のモデルを明確に分離できる。

佐藤俊哉（統計数理研究所）

“Semiparametric Estimation of Random Effects Using the Cox Model Based on the EM Algorithm (pp.795-806)”

J. P. Klein

「Cox モデルのもとで EM アルゴリズムによるランダムエフェクトのセミパラメトリック推定」

母集団の一部の個体が、共通の観測不能な脆弱性 (frailty) を共有しているような生存実験について考える。ここでの脆弱性は、兄弟姉妹の間では遺伝因子や幼少時の環境因子を指し、家族（夫婦）の間では環境因子を表す。脆弱性がハザード比の乗法因子として働く場合のランダムエフェクトについては、もし、脆弱性 w が観測できれば、観測可能な共変量に対する Cox の比例ハザードモデルを適用することが妥当であると仮定する。脆弱性 w はガンマ分布に従うことを仮定し、profile 尤度に基づき、EM アルゴリズムを使って、観測された因子や観測されない因子の影響の推定値を求める。この方法をフラミンガム心臓研究データに適用し、潜在的な未観測因子の影響を調整した場合の喫煙やコレステロールレベルのリスクを調べる。

藤井良宜（宮崎大学）

“A Statistical Distribution with an Unbounded Hazard Function and Its Application to a Theory from Demography (pp.807-818)”

D. Zelterman

「非有界なハザード関数を伴う分布とその人口学

の理論への応用」

$0 \leq t \leq \phi$ でハザード関数 $\mu(t)$ が $(\phi - t)^{\beta-1}$ に比例し、形状パラメータ β が $0 < \beta < 1$ であるような分布を導入する。このハザード関数は人口学における加齢の理論から示唆される。本論文ではこの分布の特徴とパラメータの最尤推定について議論する。異なった集団をプールするため分布の混合も考慮する。このモデルを Gompertz 分布、一般化 Pareto 分布と比較し、100歳を越えた女性の生存データにもとづき人間の寿命の上限を推定する。（ちなみに推定された上限は112.23歳）

佐藤俊哉（統計数理研究所）

“Robust Procedures for Testing Equality of Covariance Matrices. (pp.819-827)”

P. C. O'Brien

「共分散行列が等しいという仮説の検定のためのロバストな方法」

正規分布の仮定のもとで、分散が等しいという仮説の検定は、一変量あるいは多変量のいずれの場合においても、正規性からの乖離に対して敏感である。シュミレーション研究の結果では、正規性からのわずかな乖離と、中程度の大きさの標本で、有意水準 $\alpha = .01$ の場合に、第一種の過誤の割合が.02を超えた。一変量の場合には、Levene の検定を改良したものが良好であることが知られているので、それを多変量の場合へと一般化したものを二種類提案する。それらの方法は、いずれも正規性からの乖離にたいしてロバストであり、計算も容易である。ここで提案した二種類の方法と、Tiku and Balakrishnan (1985, Communications in Statistics - Theory and Methods, 14, 3033-3051) により提案された方法の検出力を比較した結果、これらの三種類の方法は対立仮説に応じて使い分けることが望ましいことが示された。

市川雅教（東京外語大学）

“Proportional hazards Model with covariates subject to measurement error (pp.829-838)”

T. Nakamura

「共変量に測定誤差が伴っている場合の比例ハザードモデル」

比例ハザードモデルにおける共変量に測定誤差が伴っているときには、通常の部分尤度に基づく最尤推定値は漸近的にも偏っている。Prentice (1982, *Biometrika* 69, 331–342) はそのような偏りの例を示し部分尤度を変形することを提案している。

この論文は修正スコア法 (Nakamura, 1990, *Biometrika* 77, 127–137) を共変量の測定誤差が正規分布に従いつつ加法的である比例ハザードモデルに応用している。その結果、通常の部分尤度に簡単な修正を施すことにより、漸近的に不偏な推定値が得られることになった。その修正の正当性は限られたシミュレーション研究により確かめられた。

中村 剛 (長崎大学)

“An Algorithm for the Mean and Variance of the Noncentral Hypergeometric Distribution (pp. 889–892)”

J. Liao

「非心超幾何分布の平均値と分散のためのアルゴリズム」

非心超幾何分布の期待値と分散を求めるためのアルゴリズムが提示されている。

このアルゴリズムは Harkness (1965, *Annals of Mathematical Statistics* 36, 938–945) が与えた等式に基づいている。FORTRAN 言語によるサブルーチンが示されている。

(注：本文 (2) 式の右辺第 1 項の $E(X | t, m_1, n_1, n)$ は $E(X | t, n_1, m_1, n)$ の誤り)

高木廣文 (統計数理研究所)

“The Efficiency of a Weighted Log-Rank Test Under a Percent Error Misspecification Model for the Log Hazard Ratio (pp.893–899)”

D. M. Zucker

「対数ハザード比の誤った見積もりのもとでの重み付きログランク検定の効率」

2つの生存分布の比較には重み付きログランク検定を用いるのが自然であり、あらかじめ決められた対数ハザード比関数にもとづいた重みを用

いる。本論文では、事前に見積もった対数ハザード比がある一定の幅で誤っている (percentage error) 場合の重み付きログランク検定の効率を検討する。この検定は問題としている対立仮説のクラスに対し最大効率ロバスト検定であり、最大効率の簡単な表現を与える。

佐藤俊哉 (統計数理研究所)

“A robust line transect method (pp.901–909)”

S. T. Buckland and B. J. Turnock

「ロバストなライントランセクト法」

通常のライントランセクト法は、個体が観測者が発見する前に反応して動かないという仮定とトラップライン上にいる個体は見逃さないという仮定に大きく依存している。ここでは第1の仮定に対して頑健で、さらに第2の仮定を必要としない調査法および解析法を提案する。この調査は、通常のライントランセクト法により比較的近くを見る観測者に加えて、見落としても大きいがいより広い視野を持つ第2の観測者が独立に目視を行うものである。たとえば、船や陸上で探索している観測者の前をより広い範囲をカバーするヘリコプターが飛ぶといったものが一つの例である。2つの観測場所を同一船上に持つ船の調査も考えられる。1つの観測場所からは望遠鏡を手で持つかあるいは裸眼で目視を行う。もう一つの観測場所は他の観測場所からは見えないところにあつて、観測者は三脚に乗った高性能の望遠鏡で探索を行う。(第一著者はライントランセクトの専門家として80年代半ばにIWC (国際捕鯨委員会) に招かれ、以来鯨の目視調査とデータ解析に関して厚い信頼を得ている。この方法は、70年代終わりから続いている南氷洋における目視調査を行う中で、以前から開発されてきたものにイシイルカ用に若干の工夫を加えたので、批判的にみた場合、どの点も本質的に新しいか内部のものにとっては必ずしも明かでない。誠実な人柄から考えて、著者らはIWCで開発され、錬られて来た方法を一般に知らせることを第一に考えたと推察したい。)

岸野 洋久 (東京大学)

“Marginal Models for Correlated Binary Responses with Multiple Classes and Multiple

Levels of Nesting (pp. 939–950)”

B. F. Qaqish and K.-Y. Liang

「多数のクラス，多水準の入れ子構造を伴った相関のある二値反応に対する周辺モデル」

相関のある二値データに対するモデルを与える。多数のクラス，多水準の入れ子を含む一般回帰構造を得るために，周辺確率とオッズ比を考慮する。推定は，Liang と Zeger (1986, Biometrika 73, 13–22) によって提案された Generalized Estimating Equations によって行う。それらは条件付きモデルと対比され，その2つのモデルを選択する際の注意点を与える。遺伝疫学からの例が示される。

松山 裕（東京大学）

“On Estimating Standardized Risk Differences from Odds Ratios (pp.961–964)”

K.-F. Yu

「オッズ比からの標準化リスク差の推定について」

Greenland and Holland (1991, Biometrics 47, 319–322) は共通オッズ比の仮定にもとづいてスムージングした標準化リスク差の推定量を提案した。この推定量は共通オッズ比の一致推定量を適切に選べば標準化リスク差の最尤推定量となる。問題を整理して最尤方程式を導く。

（Greenland and Holland が回答で述べているように，Lane and Nelder (1982, Biometrics 38, 613–621) でより広範な問題が扱われている）

佐藤俊哉（統計数理研究所）

大学の改組における統計学の教育・研究体制について

現在，国立大学を主にして，多くの大学で改組の計画が議論されています。統計学研究連絡委員会では，これについて，下記の内容での意見の一致を見ました。この見解をどのような機会に，どのような形で公表するか，またどのように効果あるものにするかについては，さらに検討する予定です。

記

大学等設置基準の大綱化，自己評価システムの導入，大学院の整備・充実等に関する大学審議会

の答申に基づき，一般教育と専門教育の見直し，教養部の改組を含む一般教育実施組織の再検討，大学院の整備・充実が各大学で進められている。この改組の中で，大学における統計学の教育・研究のあり方に見過ごしがたい問題が生じている。

昭和58年11月18日に出された学術会議勧告「統計学の大学院研究体制の改善において」が強調しているとおり，統計学は，人文科学，社会科学，自然科学のあらゆる分野において，情報の解析と理解のための方法論として，重要な役割をはたしている。そのために従来の大学の教養課程のカリキュラムには，統計学関連の講義が必ず組み込まれており，そのための教員が確保されていた。

しかしながら現在進行している改組においては，統計学が学術諸分野に共通の基礎であるという性格のために，教科目としての要求が強いかかわらず，そのための教員の確保と配置が，必ずしも適切に計画されているとはいえない。実際，大学によっては，統計学を含む共通基礎的な部分の教育を外部非常勤講師に委ねようとしたり，あるいは教員を非系統的に専門学部に分割配置しようとする議論があるが，これは将来において統計学教育の質を低下させかねない。

統計学以外の分野にも，語学，数学など，共通基礎というべき部門が存在するが，これらの分野においては，一つの単位に教員がまとめられ，教育・研究の両面において質を高めるための体制が保たれている。大学の規模にもよるが，統計学においても，教育・研究の質を保持あるいは向上させるには，共通基礎という性格に基づいて，ある単位で教員を集結させることが必須である。

各大学の改組計画には，以上のような視点がとられることを希望する。

柴田義貞（放射線影響研究所）

1992年度第6回理事会議事録

日 時：1992年9月21日（月）18:00-20:30

場 所：東京医科歯科大学

出席者：佐久間（会長），正法寺（会計），駒澤（庶務），上坂，魚井，大橋，奥野，後藤，佐藤（喬），佐藤（俊），高木，高野，種村，丹後，椿，柳川，吉村，（以上理事）栗原（事務局）

議事次第：

1. 途上国研究者へのIBC参加について

本学会の第16回IBC（ニュージーランド，1992.12）への途上国研究者の参加援助は次の通り，本部の援助審査委員会で決まったとの報告が庶務理事からあった。

援助該当者は次の通りである。Ms. Nisha Babwa（インド）および Dr. Abbas Gerami（イラン）Dr. Rosa Estarellles（スペイン）。なお，今回の応募者は27名であった。

2. 'Biometrics' 等の編集企画について

吉村理事（編集担当）から次のような最近の本部刊行物の編集に関する動向について報告，問題提起があり，検討した。

- (1) 本部から会員（A会員を除く）へ「問い合わせのアンケート」として 'Biometrics' を理論編 (Section A) と応用編 (Section B) の2種類を刊行するか，また従来の各巻を増項することで応用分野を編集刊行するか，編集拡大による会費値上げの経済的問題，編集部門の協力問題をどうするか。また現在，ASAが新しい環境科学関係の雑誌の発行を企画を図っているので，ASAと協力関係の編集企画問題も含め，これらの問題をどうすべきかの報告と問題提起があった。

検討の結果，理事会の意向としては応用編を企画する場合，①ASAと共同編集企画は行わない。②IBSの主体性ある国際的編集企画を行う。③編集部門への協力は日本支部として現状では参加を見合わせることにした。

- (2) Bulletin から各支部の年会のアブストラクトを除く案が出ているとの報告があった。

3. IBCの衛星会議について

IBCの衛星会議 'International Conference on Environmental Biometrics' はオーストラリアの国内学会がサポートしてシドニーで行われるとの報告が吉村理事からあった。

4. 学会誌「計量生物学」の投稿状況について

現在9件の投稿があり，うち4件を採択，Vol.13に掲載，他は査読または照会中との報告が丹後理事からあった。

5. 第15期学術会議の統計学研究連絡委員会（統研連）について

統研連の第4回会議（7月20日）の次の2件

の主な議題について，柴田理事（担当）の報告書，および吉村理事の補足説明があった。

- (1) 文部省科学研究費〔複合領域（細目）統計科学〕の審査員候補者推薦に関する件

第15期統研連の第4回会議（7月20日）において本学会が推薦した2名に加えて，他学会推薦の10名の候補者について，第1段審査員候補者6名，第2段審査員候補者2名を決定した。また，実際の審査員数は第1段3名，第2段1名であるので，推薦順位については統研連委員長に一任した。

- (2) 学会データベースのあり方に関する件
学会データベースの連用，たとえばデータ項目，会員名簿の公表などに関して，各学会の意見を取りまとめるように統研連委員長から要請があった。理事会の意向として，名簿についてはオープン，非オープンの部分を検討，関連学会の統一名簿作成へ前向きに対処する。

6. ニュース・レターについて

ニュース・レターNo.41は予定どおり10月中旬に発送する。

7. 1993年度年会の特別テーマについて

1993年度年会の特別テーマは次回（11月）の理事会に企画案を提示，決めることにした。

8. 1993-1994年度理事選挙の '選挙管理委員会' の委員選出について

同委員として折笠秀樹会員（自治医大），橋本哲男会員（統数研）に委嘱することにした。

9. 本学会協賛の日米バイオ統計学会議（都ホテル東京（白金台），11月9日～10日）について
Measurement Errors, Mis-classification, Overdispersion を盛り込んだテーマで120名～150名の参加者を予定し，同会議を開催する報告が柳川理事からあった。

10. 賛助会員の入会状況について

8月末に賛助会員として入会の依頼を約60の関係機関に行い，9月21日現在数社から入会の申込があった。

11. 次回理事会は11月10日（火）を決めた。

Japanese Journal of Biometrics へ
ようこそ!!

本学会雑誌である Bulletin of the Biometric

Society of Japan の名称が Vol.13 から「Japanese Journal of Biometrics」へと変わり、体裁、内容も少々新しくなりました。その主なねらいは、会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすことにあります。そのため、投稿原稿の種類を次の5種類としました。

1) Original Articles (原著)

計量生物学 (Biometrics) 分野での諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2) Reviews (総説)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その将来への課題、展望についてまとめたもの。

3) Preliminary Reports (研究速報)

原著ほど、まとまっていない、あるいは、独創性ははっきりしないが、なんらかの創意工夫がこらされているもの。また、年会で発表された論文（招待講演、一般講演とも）で、原著として投稿するほどまとまっていないもの。

4) Consultant's Forum (コンサルタント・フォーラム)

会員が現実に直面している具体的問題の解決法、または、新しい方法論を開発した会員がその適用場面を模索する、などに関する質問。編集委員会はそれを受けて、適切な解答例を提示、または、討論を行う。なお、質問者（著者）名は掲載時に匿名も可とする。

5) Letter to the Editor (読者の声)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

この中で、特に Preliminary Reports については、未完成の論文掲載を目的として、「とりあえず、Preliminary report として報告しておき、後に改訂して、他雑誌 (Biometrics など)」へ投稿したい」と考えている会員のために設けたものです。また、Consultant's Forum は、現実問題を通して、アプローチの方法、解決方法の模索など、会員相互間の交流の場として、活発に利用されることを期待して設けたものです。

ただ、本学会は、The Biometric Society の日本支部としての性格上、記事のタイトルはこれまで通り英文で統一することにしていますが、本文

は和文、英文いずれでも構いません。なお、投稿に際しては、新しく改訂となった投稿規定、原稿作成要領 (Vol.13, No.1 から) を参照して、学会事務局編集委員会宛お送り下さい。

(Japanese Journal of Biometrics 編集担当理事 丹後俊郎)

会計理事からのお知らせ

1993年度の会費の納入をお願い致します。本学会の会計年度は国際計量生物学会の会計年度に合わせて1-12月です。BおよびC会員に対して、一か年会費を未納にした会員は規定に従い雑誌BIOMETRICSが届かなくなります。本学会の運営を健全にするためにも、これまでに会費を未納にしている会員は、本年分と合わせ至急会費をご納入下さるようお願い致します。

開発途上国援助のための「特別会費」は、会費に2,000円上乗せをお願い致します。なお、特別会費を送金される場合にも通常の会費納入口座を利用し、特別会費であることを通信欄に明記して下さい。詳しくは、ニュース・レターNo.37をご覧ください。

会 費	1992年度	1993年度
A 会員	3,500円	3,500円
B 会員	8,000円	8,000円
C 会員	4,500円	4,500円
特別会費*	———	2,000円

*A, B, C 会員会費に2,000円上乗せして下さい。

郵便振替口座:

東京5-22365 日本計量生物学会

銀行振込口座:

第一勧業銀行飯田橋支店

普通061-1499027

日本計量生物学会

または、

三和銀行 飯田橋支店

普通624-3596166

日本計量生物学会

(会計理事 正法地孝雄)

事務局からのお願い

所属、連絡先等に変更のあった会員の方は、事務局まで御一報下さい。

ニュース・レター編集委員会からのお願い

編集委員会では会員からの原稿を募集します。国内・国外での関連学会への参加報告や印象記、海外での研究・活動状況などの報告を歓迎します。ただし、投稿された原稿の掲載の採否は編集委員会が決定します。

ニュース・レターNo.37から Biometrics に掲載された論文の日本語要約を再開しましたが、要約は完全に会員の方々のボランティア活動に依存しています。編集委員会から要約の依頼がありましたら、ご多忙中とは思いますが、御協力を宜しくお願い致します。

日本計量生物学会事務局 〒162 東京都新宿区神楽坂1-3 東京理科大学工学部経営工学科 奥野研究室 Tel. (03) 3260-4271内3339 栗原恵美子	編集委員会 高木廣文 種村正美 佐藤俊哉 〒106 東京都港区南麻布4-6-7 統計数理研究所 Tel. (03) 3446-1501 Fax. (03) 3446-1695
--	---